

中学校地理的分野の指導と評価

山下 豊*

I. はじめに

成績評価が、相対評価から絶対評価へと変わった。学習の評価には、以下の趣旨がある。

- ◇ 教育がその目標に照らしてどのように行われ、生徒がその目標の実現に向けてどのように変容しているかを明らかにし、また、どのような点につまずき、それを改善するためには、どのように支援していくべきかを明らかにしようとする、教育改善の方法と言うべきものである。
- ◇ 生徒にとって評価は、自らの学習状況に気付き、自分を見直すきっかけとなり、その後の学習を促す意義がある。

これまで長い間、趣旨とは別に、生徒指導要録は単なる記録にとどまり、生徒の学習指導の改善には、この趣旨をほとんど活用してこなかった。評価は学習指導のゴールであり、5段階で評定をつけることによって指導が終了すると受け止めてきた。

今、「評価の基本を総括的な評定から観点別評定へ」、「相対評価から絶対評価へ」、「単なる記録から授業改善の手がかりへ」と評価改革が迫られている。社会科においてもこうした改革の流れをしっかりととらえ、意欲をもって工夫改善に努める必要がある。

II. 目標と指導と評価の一体化を

学習指導要領には、「社会的事象についての確かな知識・理解を図りながら、社会的事象への関心を高め、社会的な態度を育てる」、「身に付けた知識や社会に対する見方や考え方などを生かしながら、社会全体を豊かに営むようにすることができる」(態度)、「社会的事象を具体的に調査し、各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを表現するとともに、社会的事象の意味をより広い視野から考える力を育てるようにする」(理解・能力)などが記述されている。

このように、学習指導要領には各分野の目標は、「理解」「態度」「能力」の要素から構成されていて、これらは社会科の学力の栄養素である。これらの栄養素を相互に関連づけて統一的に身に付けるようにすることが大切である。

これまで、「指導と評価の一体化」と言われてきた。これは指導のあるところには必ず評価があり、評価のない指導は存在しないということを意味する。このことを図式化すると「計画を立てる→指導する→評価する→結果をもとに計画を立てる→さらに指導する→…」となる。

指導と評価の関係をこのようにとらえることは、目標に位置付けられた、その学習で子供に身に付けさせたい社会科の学力を子供一人一人に確実に身に付けさせる（充実した指導）ということであり、また、どのようにして身に付いたかを見極める（学習状況の評価）ことである。これは、目標が単なる題目になったり、絵に描いた餅になったりしないためである。そこで、子供一人一人に社会科の学力を身に付けさせるために「目標と指導と評価の一体化」を大切にしたい。詳細については、図1を参照されたい。

「目標と指導と評価を一体的にとらえる」ためには、以下の3点をおさえる必要がある。

- ① 学習指導要領の目標を受けて、各学校が設定しなければならない「単元や小単元の

*札幌市立啓明小学校

- 指導目標を設定」する。
- ② 目標が実現するためのステップ（学習活動の展開）を工夫する。
 - ③ 評価の観点や内容が、目標や実際の指導と連動し一体化していること。

その際、知識・理解的な事項だけでなく、態度や能力に関する事項も位置付けるなど、単元を通して身に付けさせたい「基礎・基本」を明確にする配慮が必要である。また、目標や指導において子供の学習意欲や考える活動を重視しているのに、学習過程に考える場面が一切設定されていなかったり、子供の学習状況をペーパーテストだけに頼って、知識や技能的な内容に偏重した評価が行われていることにも注意しなければならない。

III. 『世界の国々の構成と地域区分』の実践から

1. 目標と評価について

シンポジウムの議論の中で、国名知識や都道府県名知識に希薄な高校生や大学生が増えている現状に危惧する声が多々あがっていた。また、高校や大学で地理学習を履修する生徒が減少しつつあることも話題となり、少なからず地理教育の危機を感じざるを得ない。また、それだけに義務教育において地理学習が果たす役割の大きさに責任の大きさを痛感する。

そこで、ねらいの中に「国名知識の習得」が位置付けられている『世界の国々の構成と地域区分』の実践を簡単に報告する。

『世界の国々の構成と地域区分』は大項目『世界と日本の地域構成』における中項目『世界の地

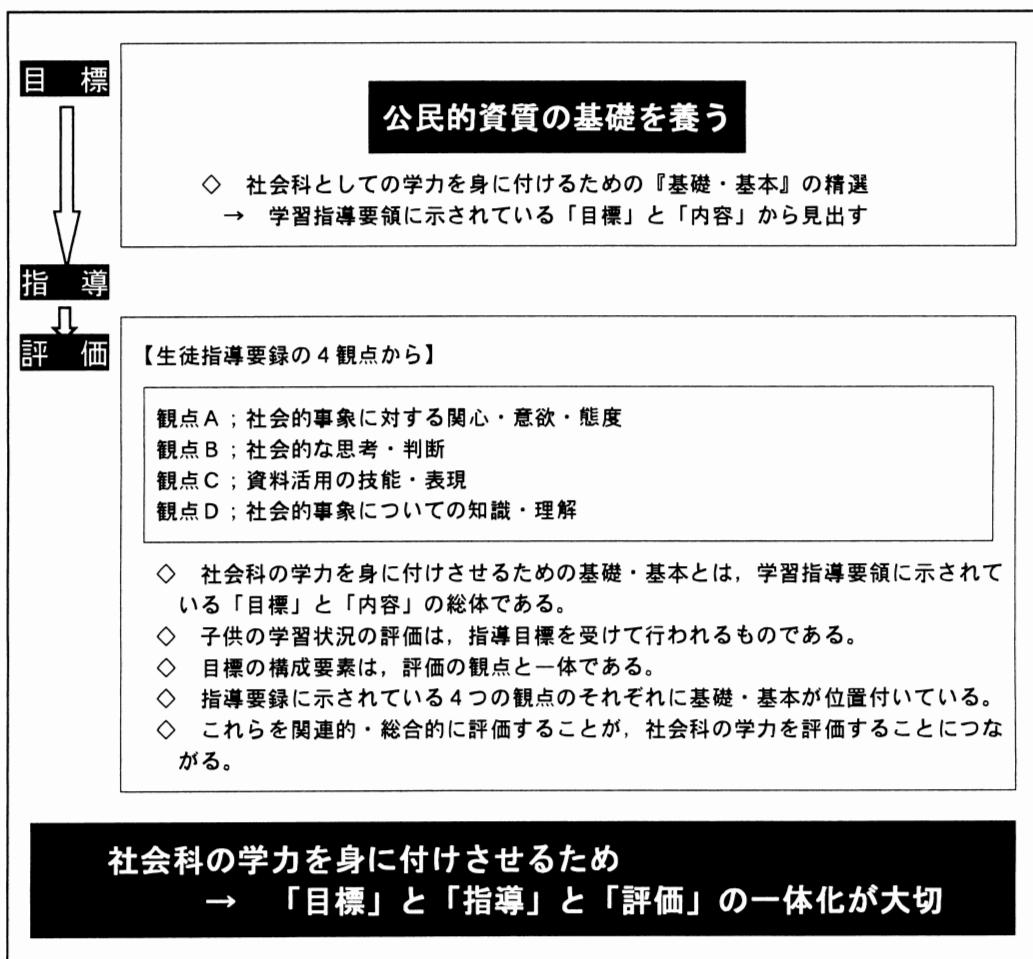


図1 目標と指導と評価の一体化

◇ 学習指導要録の内容

地球儀や世界地図を活用し、緯度と経度、大陸と海洋の分布、おもな国々の名称と位置などを取り上げ、世界の地域構成を大観させる。

現代の世界は、州や大陸及びそれらを幾つかに区分した地域でとらえられていることや、様々な国々から構成されていることを理解させ、おもな国々の名称と位置を地図を用いて身に付けさせるとともに、地名や地図への関心を高める。

◇ 評価の観点及びその趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
生活舞台としての地球に対する関心を高め、地球上の位置関係を水陸の分布、国々の構成と地域区分を意欲的に追究し、世界の地域構成をとらえようとしている。	世界の地域構成を地球上の位置関係と水陸の分布、国々の構成と地域区分を基に多面的・多角的に考察している。	世界の地域構成をとらえるために地球儀や世界地図を活用するとともに、世界の地域構成を追究し考察した課程や結果をまとめたり、説明したりしている。	世界の地域構成を地球上の位置関係と水陸の分布、国々の構成と地域区分を基に理解し、その知識を身に付けている。

◇ 評価規準

指導目標	社会的事象への関心・意欲・態度
○世界の地域区分、 <u>国々の名称と位置などに</u> 関心を持たせる。	・世界全図の略地図を自分なりに工夫して描く活動に意欲を持って取り組んでいる。
○国境の意味、自分なりの略地図の描き方や国名知識の身に付け方を考えさせる。	・ <u>国名知識の身に付け方を自分なりに工夫する活動に</u> 関心を持ち、意欲的に取り組んでいる。
○略地図の描き方を身に付けさせる。	社会的な思考・判断
○世界の地域区分、 <u>おもな国々の名称と位置を地図上で</u> 身に付けさせる。	・世界全図の略地図の描き方や国名知識の身に付け方を自分なりに考え、工夫している。 ・国として成り立つ条件や国境の意味を、現実世界の実態を踏まえて考えている。
	資料活用の技能・表現
	・世界全図の略地図を自分なりに工夫して描いている。 ・世界の地域区分や国境について、地球儀や世界全図を活用して考えている。
	社会的事象についての知識・理解
※ アンダーラインは筆者による	・ <u>世界のおもな国々の名称と位置を地図上で</u> 身に付けてい る。 ・世界の国々の多様性や地域区分を理解し、その知識を地図上で身に付けている。

図2 目標と評価

域構成』に位置付けられた小項目である。この項目は、世界の地理的認識を深める上で座標軸となる地域の基本的な枠組みを身に付ける上で大切なものとなる。国名知識（都道府県知識）を身に付けさせるのは、世界（日本）の地理的認識を深める座標軸をつくるためだといえる。また、こうした座標軸に当たるものは日常生活においても新聞やテレビなどを通じてたびたび出てくることから、関心を喚起する上でも効果的である。この点を考慮して、国名知識は世界の輪郭が描ける程度に身に付けることが求められる。そのことは、特定の州や大陸に集中しないように万遍なく分布するように配慮して身に付けさせることが望まれる。量的には、世界の国々の約3分の1から4分の1を身に付けさせることが目安になる。

2. 指導について

教科書や資料集には生徒にとって効果的な国名知識の身に付け方を紹介している。効果的とは、生徒の興味関心を喚起するとともに、一度習得したら忘却することがないことである。例えば、「シドニーオリンピックで金メダルを3つ以上とった国」、「多くの国と接している国」、「英吉利・露西亞など国名漢字から」、「面積の大きな（小さな）国」、「内陸国」、「人口の多い（少ない）国」、「おもしろい名前の国」、「形がユニークな国」、「似た国名の組み合わせ」などが紹介されている。

この授業を終えた後に『国の名前と位置テスト』を行うことを予告し、上記の学習内容が含まれたワークシートを各生徒が取り組んだ。新しく覚えた国を白地図に記入しながら、生徒は楽しそうに活動していた。この活動の中で、白地図をじょうずに色分けしたり、習得した国数を累計し、自分の目標にどれだけ近づいたかを確認したり、国々の形をトレーシングペーパーでなぞり、それに動物の名前をあてたり…と自分なりに工夫して活動する生徒が多くいた。

指導する際には、国的位置を見つけるために地図帳の「さくいんの使用法」を徹底した。最初のうちは、さくいんをじょうずにひくことができなかったり、具体的な場所を見つけられずにいたりする生徒が多かったが、繰り返し活動を行うことにより、ほとんどの生徒が習熟することができた。

また、緯度・経度の学習と関わりを持たせて、常に北緯・南緯、東経・西経を意識させて、白地図に記入させることにした。

3. 評価について

白地図中の国々に1～130の番号を付けて、その国名を記入させるテストを行うことにした。ある州や大陸に偏ることなく作成した。小国が多いヨーロッパ州については、縮尺を小さくする配慮をした。また、『基礎・基本編（50か国）』、『応用編（80か国）』に分けて出題し、生徒が活動して習得してほしい国を『基礎・基本編』として出題した。テスト前に、「改めて白地図がほしい」という声が相次いだ。効果的な学習方法を教えてきたつもりであったが、生徒はと言うと、ひたすら白地図に国名を記入しての丸暗記（？）が目立った。それで白地図がたくさん必要だったのである。

結果、どの生徒もこの学習以前よりも国名知識が増えた（どの生徒も二桁以上の得点）。ただし、このテストの実施時点での知識ではあるが。今後、時間の経過とともにどれだけの量が忘却されるのかが注目される。

なお、評価・評定に関わっては、自分なりに工夫して活動している生徒については、授業の中で取り上げ、紹介するなどした（関心・意欲・態度…質的な側面）。また、61点以上はa、20～60点はb、20点未満はcと評定した（知識・理解…量的な側面）。

あわせてテスト終了の次時から、一層の徹底を図るために『基礎・基本編』から10問ずつ出題する小テストを実施した。

IV. 本校社会科の具体的な評定の在り方

評定については、上記の例のように一人一人の生徒について細かに行っている。絶対評価に変わり、公立中学校では評定に関わる保護者および生徒に対する説明責任が大切となってきた。このことは、評価の総括が正しく行われているかを理解していただくこと、また高校受験において選抜資料として3年間の学習成績（学習点）が用いられていることと大きく関係していると考えられる。

それだけに、今後は評価方法に様々な工夫をしなければならない。これまでではどちらかと言うと

【ある観点の評価方法】

学 期	1学期			2学期				3学期	
	資①	資②	資③	資④	資⑤	資⑥	資⑦	資⑧	資⑨
満点	5	10	20	5	5	10	20	10	20
CP a 3点	4	8	16	4	4	8	16	8	16
CP b 2点	2	4	8	2	2	4	8	4	8
CP c 1点	0	0	0	0	0	0	0	0	0
比重	1	1	2	1	1	2	2	1	2

3 = A
2 = B
1 = C
1学期 B
2学期 A
学年末 B



生徒Xの素点	3	6	15	4	4	6	16	5	7
生徒Xの評価	b	b	b	a	a	b	a	b	c
生徒Xの換算値	2	2	2	3	3	2	3	2	1

$$(1\text{学期}) \quad \Sigma (\text{換算値} \times \text{比重}) \div \Sigma (\text{比重}) = (2 \times 1 + 2 \times 1 + 2 \times 2) \div (1 + 1 + 2) = 8 \div 4 = [2]$$

$$(2\text{学期}) \quad \Sigma (\text{換算値} \times \text{比重}) \div \Sigma (\text{比重}) = (3 \times 1 + 3 \times 1 + 2 \times 2 + 3 \times 2) \div (1 + 1 + 2 + 2) \\ = 16 \div 6 = 2.7 \rightarrow \text{四捨五入すると } [3]$$

$$(\text{学年末}) \quad \Sigma (\text{換算値} \times \text{比重}) \div \Sigma (\text{比重}) = (8 + 16 + 4) \div (4 + 6 + 3) = 28 \div 13 = 2.2 \\ \rightarrow \text{四捨五入すると } [2]$$

【ある学期の評定方法】

観 点	評価
関心・意欲・態度	A
思考・判断	B
技能・表現	C
知識・理解	A



数値化	×比重	… a	=	… b
5	1		5	
3	2		6	
1	3		3	
5	4		20	

a ; 比重の和 = 10
b ; 総点 = 34
$34 \div 10 = 3.4 \rightarrow \text{四捨五入}$
ある学期の評定は [3]

図3 評定のあり方

ペーパーテストに頼って評価・評定を行ってきたが、今後は生徒の学習活動を活発にするなどの授業改善の工夫を行い、その評価には「作品法」、「観察法」、「自己評価の導入」等を取り入れる必要がある。その際、評価は目に見えるものしかできないので、目に見えないものをいかにして見えるようになるか、見えるようになったものをいかに評価するのかを吟味することが大切になってくる。